天降川の姿 その3

天降川川筋直し三五〇年記念

川筋直しと山ケ野金山

今年は、国分平野を斜めに分断するように流れていた天降川が寛文六（一六六六）年、現在のような川筋に変わって三五〇年を迎えます。今回は川筋直しの発端と横川地区にある山ケ野金山との関わり合いについて紹介します。

藩主島津光久の決断

薩摩藩第二代藩主島津光久は、寛文元（一六六一）年三月、参勤交代で国分小村（現広瀬）に宿泊した際、「大雨によって天降川がたびたび氾濫し、家や田畑を押し流すため、甚大な被害を被っている」と、住民から地域の実情を聞きました。

光久は、国分の[注1]地頭であった喜入休右衛門久守を呼び、宮之城島津家の第四代当主島津久通に次のように指示しました。

①大野原台地を掘り、川筋を直すこと。
②府中の台地を掘り、手籠川と天降川を合流させること。
③旧河川への水の流入を防ぐため、堤防を築くこと。

久通は、地盤が軟弱で水量も多く難工事が予想されることから、この命令を固辞しましたが許されませんでした。

そこで久通は岸良勘左衛門兼全を普請奉行に、翌年には大山三郎右衛門広綱を副奉行に命じて、光久と工事に当たりました。

光久がこの難工事をあえて久通に命じたのは、久通が土木工事に長けており、新田開発で多くの実績を持っていたことが挙げられます。

島津久通とは

島津久通は、島津家中興の祖といわれた第十五代島津家当主島津貴久の弟・島津尚久を初代とする宮之城島津家三代目の島津久元の嫡男として慶長九（一六〇四）年に生まれました。寛永二〇（一六四三）年に宮之城領主となり、正保二（一六四五）年に薩摩藩主島津光久の家老職に就いて、新田の開発や杉の造林、紙すきの奨励、茶の栽培を手掛けるなど、藩の財政再建に努めました。

山ケ野金山の様子「三国名勝図会」

また、久通は武術や馬術にも優れ、歴史の研究や史料の編さんにも携わり、島津家の史料である『島津世録記』や『征韓録』にも関わりました。

中でも、領内にあった[注2]山ケ野・永野で金山が発見されると、陣頭に立って金の産出に携わりました。産出した多量の金は、疲弊した薩摩藩の財政を助けるとともに、天降川川筋直しをはじめ、藩内の土木事業の財源としても使われました。

山ケ野金山の発見

山ケ野金山の発見は、川内川の支流で農夫が金鉱石を発見したのが始まりとされており、久通はすぐに光久に報告し、金山の探索に当たりました。

その結果、寛永十七（一六四〇）年三月に、永野の夢想谷から露出している金塊を発見しました。その金塊は『あたかも赤牛の伏せたるが如く（赤牛が伏せているぐらい固まっているさま）』と伝えられています。幕府の採掘許可が下りた翌年からの三年間で約二六トンもの金を産出したため、幕府から採掘中止の命令が出されたほどでした。

十三年後の明暦二（一六五六）年に金の採掘は許され、昭和二十八年の閉山までの二九九年間で金の総産出量は八〇トンにも上りました。これは江戸幕府直轄領であった佐渡金山をしのぐほどの量でした。

この豊富な金と採掘で培われた坑道の掘削技術は、天降川の川筋直しを行う上で、資金と技術の両面で大いに役立ったと思われます。

次回は川筋直しの工事の様子について紹介します。

（文責＝鈴）

注1：薩摩藩の地方行政区である外城の責任者　注2：金山は山ケ野・永野の領域から産出したが、ここでは山ケ野金山で統一した。